

春の褒章、山形県内からは 8 人

産直あぐりには農産物の加工所や食堂を併設。
「運営には女性の力も大きかったし、若い農業者も育てきた」と沢川宏一さん=2021 年 4 月 22 日午前、山形県鶴岡市西荒屋



内閣府が春の褒章の受章者を発表し、山形県内からは 8 人が選ばれた。農商工業などの業務に励み模範になるような人に贈られる黄綬褒章に 2 人、社会福祉など公共の利益に尽力した人への藍綬褒章には 6 人。発令は 29 日付。

黄綬褒章 沢川宏一さん(74)

国道 112 号沿いにある農産物直売施設「産直あぐり」(山形県鶴岡市西荒屋)で代表取締役を務める。就農から 60 年近くの経験をもとに、地域の農家の安定経営を目指し、担い手育成にも携わる。

「良い物を作っても販売価格につながらない」。そんな悩みを抱える地元の旧櫛引町と生産者が 1997 年に立ち上げた施設だ。地域を「フルーツタウン」と名付けて PR してきた。

当初は行政も関わって管理運営する組合組織だったが、組合長を任されていた 2008 年、「自立」に向けて法人化。「行政に頼っていてはだめ。生産者が責任を持って運営し、信用を高めよう。そのための努力も必要だ」と考えた。直売所と出荷者約 90 人が一丸となって、農産物の安全などに取り組んでいる。扱う果樹や野菜は、生産工程を管理するルールとして県が創設した「県版 GAP」に認証された。コロナ禍の昨年、売り上げは過去最高の約 4 億 3 千万円だったという。

代々続く農家の長男として櫛引地域に生まれた。コメを作り、江戸時代に始まったとされるブドウ栽培も手がけていた。農業高校を卒業後、すぐに就農。「仕事はきついが、農業そのものは苦ではなかった」収入を求め、若いころは冬場に首都圏へ出稼ぎに。結婚後、出稼ぎの代わりにキノコ栽培を始めた。複合経営を支える果樹にも力を入れた。

産直施設は地域農業や観光の拠点という位置づけだ。「生産者の協力が一番の力や励みになった」と振り返る。「農業に取り組みたいと思う若い人たちをもっと応援し、育てていきたい」(佐藤孝則)